

東京大学法学部のドイツ政治史研究

——批判的回顧と建設的提言（一）——

今野 元

序論 「篠原シュレ」の系譜学

一九九八年から大学院を休学しドイツに留学した筆者は、日本人研究者が国際競争に対応できていない現実に衝撃を受けた。ドイツ人のみならずポーランド人も、英米人も皆ドイツ語で討論するドイツ政治史の国際的学界で、日本の「権威」は誰一人認知されておらず、自説を携えて論戦を挑む姿も見られなかった。欧米人側も日本人を対等な知的パートナーとは見ておらず、厚遇されるのは欧米側に調子を合わせる知識人や経済関連の実務家だけである。先人の築いた橋頭堡がないドイツで、多くの日本人留学生は大学の授業や研究会に出席しなくなり、収集した史料文献を持ち帰って母校の恩師や同窓生に披露することばかり夢見るようになっていった。その際自分の研究は「政治学」だから、「理論的」だから、授業を受ける必要はない、現地学者と交流しなくてもいいという居直りも聞かれた。

かく皮肉を言う筆者も、ベルリン留学中は同門の友人との実力差を痛感して項垂れる日々であった。ある日疲れて帰宅しようとする、バスで向かい合わせに座った一人の少年が、日本でも見覚えのある小さな電子玩具をいじっていた。驚いて少年にそれは何かと問うと、案の定「Tamagotchi」だと言う。それを聞いて筆者ははっとさせられた。グローバル化の時代、日本人はすでに多くの分野で世界的に活躍し、日本製品が世界中に溢れているのに、ヨ

ロッパ政治史研究の分野では事情が異なる。日本でも理系学問は国際競争を当然とし、世界で認められているが、文系学問でも同水準の成果を出せなかつたら、専門家として恥ずかしくはないかと。しかし三年半も滞在したのに、筆者の研究成果は乏しく、国際的論議を十分喚起するには到らなかつた。欧米学問の壁は厚く、非欧米人への先入観も根強く、大規模な成果を次々に挙げないと一顧だにされないように思われた。

二〇〇二年帰国して大学院に復学した筆者は、国内の政治学者の危機感のなさ、歴史軽視の風潮、そして摩訶不思議な人事に啞然とした。日本の文系研究者は、海外の研究文献を内輪で批判しても、同一の国際的土俵で対案を掲げて戦う意慾が乏しい。「国際シンポジウム」は珍しくないが、予めその政治的傾向に共感できる欧米人を（しばしば細君同伴で）招聘するので、対決なしの御説拝聴に終わるのが通常である。更に学界を指導するべき有職研究者が、就職後や最初の著書刊行後は学術論文の執筆から遠ざかり、後輩の仕事を気軽に批評する地位に安住する事例も目立つ。丁度相撲部屋で関取が断髪後自ら相撲を取らなくなり、親方として弟子の「可愛がり」に専念するのと似ている。概説や政治評論に移行した政治史の有職者が、自らの研究業績で分野を牽引することなく、寧ろ「時代の潮流」と称して率先して「理論的」な「比較現代政治」への換骨奪胎を押し進めている。また日本には、特定の対象に限定して実証的に調査するスペシャリストよりも、海外文献を幅広く渉猟して国内に輸入するジェネラリストを好む「政治学・学」の伝統がある。「優秀」な研究者とは、先行研究を器用に紹介する「学界展望」の名人であり、演習も史料会読や研究報告より欧米研究文献の紹介が主流である。雄弁な政治評論で現実政治を善導するのが政治学者の使命だと信じるものも多く、勢い話題は歴史を離れて現代中心になり、党派性も前面に出る。人事に関しては、法学部には本物の公募求人がほとんどなく、大学、恩師、手法、党派性などを共有する「地下水脈」がいまだに払拭されていない。そこでは個性は禁物で、長い海外生活は不利に働き、海外博士号などは有害無益でしかない。COEなどの登場で共同研究が増加すると、資金力のある「有力」教授が影響力を強め、求職中の若手を傘下に収めていく。筆者は幸運にも帰国後四年目で外国語学部 of 公募に救われたが、後輩からは、歴史研究から現代研究に移らないと面倒を見

ないと教師から圧力を掛けられた、実践的目標を掲げない研究など何の意義があるかと嘲笑された、博士論文が一向に受理されない、公募求人が少ないのに恩顧・縁故人事には与れない、博士号も単著書もあるのに博士号なき仲間を追越されたという悲鳴が、ここ東尾張の山野にまで響いてくる。

我々はどうしてこのような状況に陥ったのか?——この問いに答えるために、我々は現状を歴史的に相対化する必要がある。そこで筆者は、東京大学法学部のヨーロッパ政治史研究の歴史的概観を思い付いた。今日の東大法学部がこの分野で日本を代表しているわけではないが、大規模な政治学者養成機関であるため人事面での影響が大きく、特に「篠原シュレー」はこの分野の現状と密接に関係しているので、この対象選択は有意義だと思われる。分析は、(1) 小野塚喜平次・吉野作造世代、(2) 岡義武世代、(3) 篠原一世代、(4) 「篠原シュレー」第一世代、(5) 「篠原シュレー」第二世代という時代区分で行い、主要な対象国だったドイツに重心を置く。各時代は、(一) 海外学界とどう対決したか、(二) 学問と政治との関係はどうか、(三) どのような水準の研究をしたか、(四) 歴史研究と現代研究との比率はどうか、(五) 世代交代はどう進んだかという視点で見えていく。

(一) 大正デモクラシー運動下のドイツ政治批判——小野塚喜平次・吉野作造世代

東京大学創生期の政治史研究については以下の点を指摘できる。(一) 政治学科は元来文学部(帝国大学文科大[学])に帰属しており、のちに法学部(帝国大学法科大学)に移転したので、文学部との縁が深かった。吉野作造が聴講した「政治史」講義は、坪井九馬三(文科大学教授)の担当で、坪井は『國家學會雜誌』にもドイツ政治研究を掲載している。(二) 東大法科政治学科には、狭義の政治学のみならず公法学も帰属していたので、法学者と政治学者との関係が密接であった。小野塚喜平次も吉野作造も穂積陳重(法理学)の寵愛を受けて就職しており、末岡精一(行政法)、立作太郎(国際法)、上杉慎吉(憲法)、美濃部達吉(行政法・憲法)など公法学者も政治史に関わる研究

を発表していた。のちに第二「政治史」講義の役割を果たすことになる「外交史」講座（一九〇六年設置）は、国際法講座から分岐したものであった。（三）「官学アカデミズム」という抑掇があるように、初期の東大法科は政官界との繋がりが深く、実務家が教壇に立ち、國家學會で講演することも稀ではなかった。ただ世紀転換期になると徐々に実務家の姿が大学から消え、「帝大七博士建白書」などを契機に、東大法科教授が知的権威として政府を批判する光景が見られるようになった。（四）開学以来東大法科にはお雇い外国人がおり、英語、ドイツ語、フランス語での講義が行われ、試験もそれぞれの言語で行われていた。しかし大正期になるとこの風習も消滅し、学生生活から外国語が遠のいていった。（五）初期の『國家學會雜誌』は、ドイツなどの研究を解説もせずにとただ抄訳するという文字通りの「輸入学問」が目立ち、特にゲオルク・イエリネックを次々に邦訳した美濃部達吉はその代表選手だった。加えてドイツの大学での法学・政治学研究の動向を紹介し、日本に導入しようとする動きも盛んであった。（六）個々の執筆者の依拠する価値観は様々だが、いずれにしても東大法科は現実政治に即効性のある知識を輸入しようという実学志向が強く、政治学は現代政治分析が主流で、その延長線上で政治評論を展開する教官も多かった。このため現実政治から距離を置いた歴史研究、思想研究が発達するのが、東大法科では大いに遅れることになった。

東大法科における政治学講座（一九〇〇年「政治学政治史講座」から分岐）の初代担当者である小野塚喜平次（一八七一（旧曆明治三）年―一九四四年）は、政治史研究の発展にも寄与した。越後長岡の資産家の長男で、薩長藩閥への敵愾心に燃える小野塚は、学部学生時代に穂積陳重に見出され、卒業後は大学院に進学した（なお結婚により小野塚は穂積と姻戚関係になる）。『國家學會雜誌』に処女作「政治学ノ系統」（一八九六年）を発表し、翌年独仏留学に旅立った小野塚は、留学中の一九〇〇年に助教採用され、一年後に帰国して教授に昇任した。長岡時代から福澤諭吉に惹かれ、自由民権運動に刺戟されていた小野塚は、学生時代はイギリス系思想に多く共鳴したが、整然たる系統的論述のドイツ流学問にも当時から敬意を有していたという。小野塚の留學生活については不明な部分が多いが、プトミーやイエリネックなど留学中に知り合った独仏人学者が帰国後の論文で論じられている。帰国後の小野塚

は政治学原論と平行して、諸外国でのデモクラシーの変容を比較することを試みた。その際小野塚は、英仏独伊土など各国の情勢を、現地語資料も駆使しつつ堅実に分析する覇気を見せた。また小野塚は、親友の「軍神」廣瀬武夫の影響か、「帝大七博士建白書」に参加したものの、その後は地道な政治・学説研究に力を注いだ。¹⁾

小野塚喜平次はドイツ政治にも比較「衆民政」論の観点から取り組んだ。そこでのテーマは「社会衆民黨の勢力増加」、「獨逸社会黨の穏和化傾向」、「宰相責任問題」、「ナウマンの中歐論」などであったが、第一次世界戦争が始まるとトライチユケを題材にドイツ「軍国主義」の糾弾を始めた。³⁾ 東京帝国大学総長となった小野塚は、公然とドイツを批判し英米を擁護するようになる。小野塚はナチス「授権法」を糾弾し、米ニューディール政策を称揚し、英ファシズム運動の不振を喜んだ。日米交渉が行き詰まった一九四一年、小野塚はグルー米大使に日本の立場を説明する高木八尺（米国憲法・歴史及び外交）講座初代担当者）に、「アメリカに対して気の毒」、「日本の弁護士みたい」と苦言を呈した。日米開戦後、小野塚は「山上御殿」での昼食時に「これで日本丸も沈没ですかね」と苦笑し、学士会館での政治学研究会では「鬼畜米英」とは何ですか」と語気を荒げた。⁴⁾

一九〇九年に東大法科政治史講座の初代担当者に採用されたのが、「大正デモクラシー」で有名な吉野作造（一七八年—一九三三年）である。陸前古川の名望家の長男だった吉野は、学部生時代に穂積陳重の法理学演習で提出していた「ヘーゲルの法律哲学の基礎」を刊行し、『國家學會雜誌』の編集にも従事して、自らも「農業保護政策ト獨逸労働者」などドイツ語文献の抄訳を発表している。政治史助教授に採用されたとき、吉野にはまだ政治史の研究業績が一つもなかったが、政治学科を首席で卒業していたことや、穂積陳重や梅謙次郎との関係が親密であったことが、この人事を方向付けたものと推測される。加えて吉野は本郷教会の雑誌『新人』で盛んに政治評論を発表しており、その内容が日露戦争や愛国心の擁護論だったので、東大法科の教授たちの共感を呼んだ可能性もある。なお吉野に研究者への道を勧めたのは穂積陳重で、七歳上の小野塚とは兄弟弟子の関係にあった。

一九一〇年に留学した吉野作造は、到着した途端に困難に見舞われた。吉野はハイデルベルク大学のイエリネック

を訪れはしたものの、僅か数回で聴講を止めてしまった。同地を僅か一学期で去ったのちは、吉野は各地を転々として、現地の学問とは正面から向き合わなかった。その際吉野は、問題を全てドイツ側の所為にした。「併し大體に於て大學の講義は頗るツマラヌものである。兼て大學の講義はツマラヌものといふことは聞いて居たが、斯れ程とは思はなかつた。最も内容に富むと云はるゝ、エリネック先生のですら、馬鹿々々しくて聞いて居れぬ。是れ學生の智識の程度が低い爲めで致方もない。」⁵ 如上の批判の背景には、留学生・吉野がドイツで味わった屈辱があつた。「大體から云ふと、獨乙人は未だ十分に日本を解して居らぬ。我々が自分で思つてゐる程に日本人を買つて呉れぬのみか、實際日本があるよりも以下に價値をつけてゐる。殊に言葉が十分に出來ぬ結果として、我々は往々何も知らぬ者として取扱はれる。[……] 實際は矢張り西洋の方は偉いので、到底日本などが自慢されたものではないが、併し此方に来て居て、言葉の不自由や何かの爲めに、思ふ通りに事が運ばぬと、斯んな事が言つて見たくなるのである。」⁶ 吉野はまた特定の欧語研究文献を精読した形跡もなく、興味あるものを拾い読みする程度だつた。ただその分吉野は現地の実情視察に情熱を燃やし、これが政治評論家としての素地を築くことになつた。現地で交流する相手は在留邦人が中心だつたが、キリスト教信仰を媒介とする一般市民との交流もあつた。

第一次世界戦争が勃発すると、吉野作造はこれを「独逸膺懲の戦争」として正当化する論陣を張り始めた。吉野は同年一月ころから、「意地の悪い獨逸氣質」、「俗悪なる獨皇帝の趣味」、「ずう／＼しい根性」、「獨逸上下の道德頹敗」と銘打つて、ドイツを声高に批判するようになっていったのだつた。⁷ 吉野の戦時評論は、ドイツを軍国主義的専制国家として弾劾し、その打倒を正当化する西欧列強の戦争肯定論と軌を一にしていた。吉野にとって日英同盟に基いた「日独戦争」はデモクラシーのための戦争であり、国内における普通選挙運動を正当化する国際政治的要因であるように思われた。吉野は軍部など国内の保守派が「独逸カブレ」となつて敵国ドイツの健闘を称えていると批判し、彼らを排撃するためにもドイツ政治批判に熱を入れた。⁸ 吉野は『中央公論』、『新人』、『新女界』など論壇誌をドイツ政治分析の舞台としたが、そこでの政治評論には引用注は全くなく、史資料の解析より実地検分や耳学問の選択

的使用が大きな役割を果たしていた。また吉野は、大学での講義をエリートの政治教育の場と考えていたので、ドイツ政治批判や「民本主義」の必然性を教壇から躊躇なく力説していた。⁹⁾

晩年の吉野作造は日本政治史研究へと移行していった。吉野による明治文化研究、東大法学部明治新聞雑誌文庫の設立は学問的に高く評価できるが、同様の手堅さを彼がヨーロッパ政治史の分野で発揮することはなく、「ドイツ特有の道」批判も政治評論に止まったのだった。

(2) 総力戦体制下のドイツ政治分析——岡義武世代

吉野作造は一九二四年に自己都合で東大法学部を退官し、二年後に研究室付き講師として復帰したものの、後継者養成は政治学担当教授の小野塚喜平次に委ねられた。小野塚は一九二六年、助手として矢部貞治、岡義武の二人を採用した。小野塚は岡より矢部を買っていたのか、政治学講座の助手としては矢部のみを採用し、岡は小野塚の勧めで泣く泣く政治史講座に転進し、吉野講師の指導を受けることとなった。岡義武（一九〇二年—一九九〇年）は、農商務省商工局長として社会立法を進め、『國家學會雜誌』の常連執筆者でもあり、退官後は大阪毎日新聞社会長を務めた岡實の御曹司であった。¹⁰⁾ 学業成績や家系が総合的に評価されたのか、岡は研究業績を挙げる前に助手に採用され、やがて助教授に昇任した。

政治史家・岡義武はドイツ近代史から出発した。処女作「環境に關聯して觀たる十九世紀末獨逸の民主主義運動」（一九二七年）で、岡は吉野が素描したドイツ帝国批判を学問的体裁にした。岡はこの論文で、経済や文化が発達した一九世紀ドイツに、「世界に於ける最も舊式な、非自由主義的な政治組織の一つが存在していた」のは「パラドックス」だとするF・A・オググ（一八七八年—一九五一年）の批判を前提として、主に一八七〇年代のドイツ帝国で自由主義陣営擡頭を阻害した要因を挙げている。この論文は、ヘルマン・オンケン、フリードリヒ・ナウマンらのド

イツ語（一部英語）文献からの情報で構成されている。実地検分や耳学問が主だった吉野とは違って、岡は典拠を示し、ドイツ国統計年鑑のような統計資料も用いている。⁽¹¹⁾これと前後して岡は、一九二六年分から一九二九年分まで毎年『國家學會雜誌』で「海外政治事情」の「獨逸」欄を担当し、ヴァイマル共和国の相対的安定期の政治情勢を紹介した。善悪二元論で快刀乱麻を断つ吉野に対し、岡のドイツ政治解説は共和国への共感を滲ませつつも比較的淡々としていた。

だが岡義武はすぐにドイツからイギリスへと視線を移していく。岡は一九三二年に労働党に関する英語文献を書評したのを契機に⁽¹²⁾、イギリス労働運動への共感を深めていった⁽¹³⁾。あるいは岡は、社会立法に尽力した父岡實の、あるいは無産政党に加担していた吉野の影響を受けていたのかもしれない。やがて岡は丸山眞男ら学生とのコンパで、公然と「イギリス労働党の立場」を自分の理想として挙げるようになっていく。それどころか岡は、「社会経済史」的視点を重視するようになり、徐々にマルクス主義に接近していった（丸山は、岡の「イギリス労働党の立場」への敬意表明は、マルクス主義への傾倒を隠すための隠れ蓑だったのではないかと見ている）。検閲がない学生相手の政治史講義では、階級闘争史観の色彩を強め、民主的か反民主的か、進歩的か反動的かの価値判断が明確で、特にレーニン帰国以前のソヴィエトへの評価が高かったという⁽¹⁴⁾。

岡義武は一九三六年から一年間イギリスに留学した（岡の留学中は高木八尺が政治史講義を代講した⁽¹⁵⁾）。吉野のドイツ留学と同じく、岡のイギリス留学も在留邦人との交流、欧米の実地検分、語学研修に終始した。岡はLSEやケンブリッジ大学を見学したが、学生として勉学に励んだわけではない。吉野がときとして欧米人に批判的視線を向け、傲岸不遜に日本人意識を示すこともあったのに対し、岡はイギリス人の振舞に（王制や保守党にまで）心酔し、日本人として劣等感を強める一方だった。また岡は、フランス滞在中には「人民戦線」万歳を叫んでいた。岡のロンドン留学の主な学問的成果は、公文書館でパークス関係文書閲覧し、帰国後に閲覧した日本側史料とともに分析して、日英関係史研究を発表したことであった⁽¹⁶⁾。岡は、ヨーロッパ政治史研究では一次史料が集めにくく、「根本史料

を基礎とした研究でなければ、学問的研究としては充分の価値をもち得ない」と感じて、日本政治史研究へと移行していったのである。⁽¹⁷⁾

一九三七年に帰国した岡義武を待っていたのは、米英と厳しく対立する日本の政治情勢であった。吉野は帰国後、日独戦争に便乗してドイツ批判の論陣を張ったが、時流に合わない岡にはイギリス礼讃を披露する場がなかった。また岡はそもそも吉野のような華麗な政治評論活動には縁がなかった。岡が帰国後『國家學會雜誌』の「海外政治事情」で直接ドイツ政治を担当することはなかったが、一九四二年一月に発表した「国際政治概観」では、ナチス・ドイツの快進撃を追跡するよりほかに仕方がなかった。とはいえ岡は、イギリスがドイツの空襲に頑強に持ち堪え、アメリカの援助で余裕が出てきたことなどにも言及するのを忘れなかった。⁽¹⁸⁾

日米開戦前後の岡義武の混迷ぶりと好対照を為すのが、小野塚の政治学講座を継承した矢部貞治（一九〇二年―一九六七年）の澆漓ぶりであった。助教教授就任後欧米に留学した矢部は、労働党の論客でマルクス主義に傾倒したLSE教授ハロルド・ラスキの講義を聴講していたが、やがて「コミニズムかファシズムか」という「二者択一」の思いに囚われ、リベラル・デモクラシーの将来を悲観するようになる。ファシズムに新しいデモクラシーを見出すようになった矢部は、フランスの「火の十字団」、ドイツのナチス党を熱心に見学した。なかでも注目されるのは、矢部がナチス法学の指導者であったミュンヘン大学教授オットー・ケルロイターの講義に心酔したことである。帰国した矢部は留学の成果を「政治学」講義で発揮しようとしたが、西洋政治思想ばかりで日本政治思想（國體論）への言及がないとして、右派学生、民間右派団体からの執拗な攻撃を受けた（小田村事件）⁽¹⁹⁾。矢部はやがて近衛文麿の勉強会「昭和研究会」の論客になり、「新体制」運動の担い手として、国家総動員体制構築の世界史的意義を宣伝するようになる。また矢部はケルロイターのナチス法学を率先して邦訳し、遂には彼を東大法学部の客員教授として招聘するに到った。⁽²⁰⁾ 戦争が終結し、関係の深い近衛文麿が戦争犯罪人に指名されると、矢部は自ら東大教授を辞し、拓殖大学総長などとして保守政界で活躍することとなる。

矢部貞治が「新体制」の寵児であったころ、これに背を向けてドイツ政治思想研究に没頭していたのが、小野塚門下の兄弟子で「政治学史」担当の南原繁（一八八九年―一九七四年）である。実学志向が強かった東大法学部において、南原は漸く登場した本格的な思想史研究者であった。南原の著作『國家と宗教』第四章に収められた「ドイツ・ナチス精神」研究は、古典古代から啓蒙思想を経て、自由主義、社会主義へと発展してきた西欧政治思想に抗議し、「種」を絶対視する現代ドイツ政治思想に批判した政治思想研究である。南原は一九三九年六月一日、東大懷徳館で開催されたケルロイター歓迎午餐会を、出る気がしないとして欠席した²³。

戦時下の東大法学部を代表するドイツ研究者としては、「外交史」教授の神川彦松（一八八九年―一九八八年）も重要である。南原、高木と同年の神川は、東大法科卒業後に立作太郎に師事して外交史を専攻し、一九一八年一月にパリ留学に出発した。だが神川はランケに傾倒し、ドイツ歴史学に接近していく。国際法講座から分岐した「外交史」講義は、神川の時代になると法学色を薄め、神川は小野塚喜平次ら「政治学研究会」の同人ともなっている²⁴。但し見逃せないのは研究室の風土の違いである。小野塚、吉野、岡と継承された政治史研究室は、デモクラシーの浸透を肯定し、国際政治観はウィルソン流の「リベリズム」を信奉していたが、外交史研究室はデモクラシーに思い入れがなく、国際権力闘争を重視する「リアリズム」の学風で、政官界との実務協力も緊密であった。

歴史学者としての神川彦松はドイツ外交史を専門とした。神川の論文「ビスマルク保障政策史論に就て」は、ビスマルクの帝国建設以後の平和維持外交を驚嘆の眼差しで追跡しており、ビスマルクに傍若無人の権化を見た吉野作造とは正反対である²⁵。また『世界大戦原因論』では、神川は吉野が支持し、ヴェルサイユ講和条約でも規定されたドイツ単独責任説に疑問を呈している。神川は、一九一四年のヨーロッパは複合的対立構造のためすでに一触即発の状態で、サライェヴォ事件がなくても「一大火災の蔓延」は不可避だったのであり、開戦当事国のいづれかに「戦争責任」を負わせようとするのは、「客観的考究にとりては不正確」だと批判したのだ²⁷。

雄弁な政治評論家でもあった神川彦松は、日本の戦争政策を支持し、戦後は東大法学部を追放された。神川は国際

連盟に英米の支配機構を見て、大東亜共栄圏の理念に共鳴し、また日独伊三国同盟にも賛同した。神川も民間右派勢力の突き上げに遭っていたので、その経験が影響していた可能性もある²⁸。神川は敗戦後に、森戸辰夫文部大臣から「不適格」を宣告された²⁹。神川追放後の一九四七年度、神川の担当科目だった「国際政治史」は岡義武が代講し、一九四八年度から一九五〇年度まで文学部助教授の林健太郎が、一九五一年度から一九六一年度まで教養学部助教授（のち教授）の江口朴郎が、法学部の「外交史」講義を担当した³⁰。西欧主義的な岡に続いてマルクス主義者の若手歴史学者が登壇し、戦前の「外交史」講義の伝統は消滅した。そしてこれに伴い、ヨーロッパ政治史研究と法学（特に公法学）との交流も失われた。

新憲法公布の一九四六年、岡義武は概説『獨逸デモクラシーの悲劇』を発表し、久しぶりに、そして最後にドイツ政治史研究の筆を執った。この著作はドイツ革命からヒンデンブルク死去までの展開を以下のように描いている。

（一）岡はドイツ革命が「ブルジョワ民主主義革命」に終わり、「労働者層の中に湛えられた革命的エネルギー」が「空しく潰滅した」ことを悲憤慷慨している。（二）にも拘らず国民議会開会以降、岡の共感は「ワイマール派」三党に移っている。中央党は戦争中に労働者、農民の比重増加で「進歩的色彩」を強めたと評価され、民主党は「ブルジョア階級及びプティ・ブルジョア」、特に後者の政党と説明されている。（三）岡はヴェルサイユ講和条約を「峻烈を極めた」「苛烈な桎梏」と表現し、戦勝国が「獨逸デモクラシー」に負荷をかけたことを批判している。（四）岡は「國權黨及び人民黨」の「反動勢力」への嫌悪を隠さない。岡は「ワイマール派」のドイツ・ナショナリズムには深入りせず、「反動勢力」の「ショーヴィニズム」のみを強調している。（五）岡は独露友好の象徴であったラパロ条約には一切触れずに、独仏和解の象徴であるシュトレゼマンのロカルノ条約のみを高く評価している。（六）岡は多党乱立による政争激化が「世界における最も民主的な憲法」への懐疑を生み、延いてはヒンデンブルク当選のような「指導者への憧憬」を呼んだことを慨嘆している。（七）岡はナチス党の支持層に中間層や農民が多かったことを指摘している。（八）岡はヒンデンブルクや大統領閣内閣からヒトラーへの政権移転を努めて連続的に捉えており、

保守派とナチスとの違いを重視しない。岡は「フリードリヒ大帝」を、「その徹底したマキアヴェリズムの故にプロイセン・ミリタリズムの卓越した代表者」と呼んでいる。また岡は憲法四八条の大統領緊急権を議会政治の空洞化の端緒として批判している。(九) 岡は一九三三年二月の国会議事堂放火事件をナチスの陰謀と断定している。⁽¹⁾ なおこの概説は発表直後に一般向けの『アテネ文庫』に収められ、戦後政治評論の色彩を帯びることとなった。

(3) マルクス主義と「アメリカ政治学」に依拠した「理論的」歴史研究——篠原一世代

東京大学法学部には敗戦で変化したところとしなかったところがある。変化しなかったのは、現実政治に加担し日本社会の善導者を自負するところであった。しかしそこで依拠する価値観は変化した。それまで顕著だった学部内の価値的多元性が、戦後の公職追放などで一掃され、穏健左派路線が共通了解のように扱われるに到った。穏健左派路線とは、日本政治の前近代性を批判し、それを体现する保守勢力を警戒し、米占領下で生まれた日本国憲法体制を支持するが、同時に「アメリカ帝国主義」を糾弾し、マルクス主義から多大な示唆を受け、ソヴィエト連邦など社会主義諸国にはきわめて同情的というものである。こうしたなか丸山眞男(日本政治思想史)、福田歓一(政治学史)、辻清明(行政学)、坂本義和(国際政治学)ら「戦後民主主義知識人」が、学部内外で支配的地位を占めるようになる。

「戦後民主主義知識人」の一人としてヨーロッパ政治史研究を担ったのが、篠原一(一九二五年-)である。篠原は「社会的身分は高くなかったけれど知的な劣等感を全く持たずに暮らし」、青山学院中等部から四修で一高、東大法学部へと進んだ。ここで篠原は岡義武の寵愛を一身に受け、一九五〇年卒業時に政治史の助手となる。助手・篠原は、岡から生活費の足しにと米人ブリントンの比較政治研究『革命の解剖』の共訳を勧められ、結核で長期入院すると、岡の配慮で論文執筆のため任期の延長を許された。このように破格の厚遇を受けた篠原は、任期終了と同時に助

教授に昇任する。岡について篠原曰く「戦後は先生が残すと言えば残れるような力を持つておりましたが、先生は僕には非常に優しく、怖かった覚えが全くない。⁽³²⁾」

篠原一の助手論文を基にした『ドイツ革命史序説』（一九五六年）は、「戦後民主主義知識人」の金字塔の一つである。篠原は岡『獨逸デモクラシーの悲劇』の論点（一）を継承しつつも、岡より遙かに幅広く一次史料を活用し、優れた構成力を發揮して雄渾な叙述を生んだ。本論は英語のエリート研究から刺戟を受け、文中でそのことに触れているが、特定の「政治学」理論に準拠した分析ではなく、社会経済構造分析と政治過程分析との混合になっている。

岡との違いは政治史から思想分析が後退している点で、ドイツ政治思想に深く根差した丸山ともここで道が分かれた。また篠原は、ごく平凡な熟語にまで逐一英語のルビを振り、アメリカ的なるものへの止み難い憧憬を表現している。跋文では「海岳の御恩」、「公私に互つて、拙い筆力では表現し尽すことの出来ないほどの御恩顧をかたじけなくした恩師岡義武先生」への謝辞が綴られている。⁽³³⁾

篠原一はこの論文を契機に、新しいヨーロッパ政治史研究を提唱し始めた。篠原はランケ以来の「いわゆる実証史学」を批判して、「アメリカ政治学」を用いた「理論的」な歴史分析を唱導した。篠原は「近代政治学」を「アメリカ政治学」と同視し、（西）ドイツの歴史学、国法学、社会学は（ケールは例外として）無視するか、克服すべき過去の遺物として扱った。篠原のもう一つの「理論的」淵源として看過できないのがマルクス主義であった。篠原論文は、ロシア革命と違って「全く歌をもたない」ドイツ革命を失敗例とし、「独占資本」や「ユンカー」を呪い、団結した社会主義勢力の武装蜂起に期待し、経済から政治を演繹する唯物史観に彩られていた。クチンスキーら東独歴史家も援用され、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンも原典から引用され、大衆を「嚮導（キャナライズ）」できなかつた多数派社会民主党の未成熟を批判する「統一社会党」（SED）指導者の見解が踏襲されている。蓋し篠原の「理論的」政治史研究とは、東独歴史学の地肌に「アメリカ政治学」の化粧を施した近代ドイツの図式的批判だったと総括できよう。

だが就職後の篠原一は政治活動に没頭し始め、ドイツ政治史研究から離れていく。すでに処女作でエリート主義的政治観を披露していた篠原は、研究も東大でのエリート教育の準備だと考えていた。「東京大学法学部は伝統的に講義を大切にしている。ここで新しい学問の成果を学生に伝達する一方、このエリートの卵たちの鋭いまなざしを一身に浴びながら、自分の学問の体系をつくり出していくという過程が日々積み重ねられている。」⁽³⁴⁾篠原は坂本義和と南原繁、丸山眞男らの「平和問題懇談会」(正確には「平和問題談話会」)に入り、安保問題で「市民」としての「自分の責任」を認識するに到る。⁽³⁵⁾一九五九年から政治評論に没入した篠原は、助手論文に続く第二の研究「国内政治家としてのシュトレゼマン」を、漸く一九六四年に岡退官記念論文集に掲載した。⁽³⁶⁾変幻自在の対応で共和国を擁護した彼に共感するこの作品は、岡の日本政治家論を想起させる一次史料に根差した実証史学で、「理論的」色彩はなくなっていた。

篠原一は一九六三年九月から二年間ボンに滞在した。篠原は西ドイツ社会の多様な面に興味を示したが、イギリスで恐縮していた岡とは対照的にしばしばドイツ人への優越感が滲んでおり、彼地にいると日本が好ましく見え、「在外ナショナルリズム」が湧いてくるとも述べている。⁽³⁷⁾篠原には西ドイツ学界の胸を借りて稽古する気がまるでなく、修行生活の悲哀を味わうこともなかった。篠原は史料重視のドイツの学問風土を皮肉交じりに評価しつつも、「アメリカ政治学」を価値基準として西ドイツ政治学の「理論的枠組」の未熟を批判した。⁽³⁸⁾けれども篠原は、吉野のようにドイツ学界に背を向けたわけではなかった。寧ろ西ドイツ学界を低く評価するが故に、発言の余地があると思ったのかもしれない。篠原はシュトレゼマン研究を深めるべく、その遺稿のマイクロフィルムを閲覧し、その成果を組み込んだ最終稿のドイツ語私家版を、帰国前の一九六五年にボン大学図書館に寄贈した。⁽³⁹⁾この未公開論文は、ドイツ語で学術交流をする意志と能力を篠原が有していたことを示している。だが篠原がその後もドイツとの交流を続けた形跡はない。篠原は更なる研究課題としてブリューニング内閣についても史料収集を行った⁽⁴⁰⁾というが、その成果は公にされなかった。なお滞独を契機に篠原は日本の一般読者向けに記事を書いたが、そこではドイツはこう、フランスはこ

う、イギリスはこうと単純明快な比較政治を披露している⁽⁴¹⁾。篠原にとってドイツ滞在は、ヨーロッパは国毎に違うという信念を強める契機となったようで、ヨーロッパ統合の進展には懐疑的な面があり、この点でのちの「篠原シューレ」とは異なっていた⁽⁴²⁾。また篠原は、バート・ゴードスベルク綱領後の社会民主党に否定的で、西側欧州各国の社会主義政党が資本主義に取り込まれていく様子を苦々しく見守っていた⁽⁴³⁾。

帰国後の篠原一は「フィッシャー論争」の先駆的紹介者となった。篠原はボンでフィッシャーの助手イマヌエル・ガイスと知り合い、『思想』掲載用の特別原稿を依頼した。本文の翻訳は後輩に任せつつ、篠原は序文を寄せている。篠原は「戦後の西ドイツ学界においてはめずらしく左翼的、批判的立場にたった学徒の一人」としてガイスを称讃し、彼が東独歴史学に言及しない理由を付度しつつも、西独歴史学に挑戦する彼の勇敢さを賞讃してこう述べた。「もちろん、第一次大戦の戦争目的を解明するためには、たとえば、ミルズのパウ・エリート論の方法を使って、政策決定の磁場を政治学的に解明することも可能であろうし、またすでにアメリカの学者が部分的に試みているように、コンテンツ・アナリシスの方法を用いて、全く新しい分野を切り開いていくことも可能である。それはともあれ、日本の歴史学者が自己の問題意識を引下げて、この世界的テーマに挑戦し、同時に自己閉塞的な日本の学界、とくにその外国研究が少しでも「開国」の方向へ足をふみ出すことを期待したい。」⁽⁴⁴⁾篠原の西独歴史学への優越意識は相変わらずだが、興味深いのは彼がここで「自己閉塞的な日本の学界」を批判し、「開国」を呼びかけていたことである。

だが結局、篠原一自身は日本のドイツ政治史研究の「開国」には貢献できなかつた。そもそも帰国後の篠原はドイツ政治史研究を発表しなくなつた。本人は「東大紛争による史料の紛失のため」とするが、同時にドイツ現代史の研究・史料が続々刊行され、「オリジナルな研究を発表することは必ずしも容易ではなくなつた」とも告白している。「研究を遷延させていれば、国際的研究の水準から脱落する」と焦つた挙句、篠原は複数の研究書の一つのテーマでまとめて論評し、単なる文献紹介ではなく自説を大胆に展開する「書評的論説」という手法を提唱し始めた。篠原は

この手法を手放しには肯定せず、それを論文と同視するのは「錯覚」だとし、日本の外国研究が「書評的論説」やそれ以下のものばかりであることに苦言を呈していた。だが篠原は同時に、「書評的論説」を積み重ねれば論文になりうることも述べ、また独創性に固執すると生産性が落ちるとして、先行研究の援用による論文執筆を事実上容認していった。⁴⁵一九七〇年代半ばになると、篠原は日本人が史料的制約を補うためには、「コンパラティブな視野」が有効だと主張し始め、ファン・リンスへの着目を契機にドイツ政治史から比較政治へと転換していった。⁴⁶この転換と共に、それまでのヨーロッパ政治史研究と文学部西洋史学との交流も薄れていった。

篠原一は一九八六年に停年退官し、「ヨーロッパ政治史」講義を教科書『ヨーロッパの政治』にまとめた。これは篠原が輸入した「政治発展論」に依拠して、大国から小国まで近代政治史を通観した画期的なものである。ただ本書は比較政治の常として各国叙述が紋切型になりがちで、大胆な断言が次々為されるが出典註や文献一覧がない。「ポリアーキー」を基準とする「オリエンタリズム」の観があり、「上部構造」などマルクス主義の用語も見える。英仏が比較的順調とされるなか、近代ドイツでは助手論文での戯画的「ドイツ特有の道」批判が強化されており、今度は東独歴史学ではなくヴェーラーが激賞されている。イタリアの民主化は跛行性がドイツより強調され、ロシアは更に格下の扱いである。また中小国への共感も著しい。なお本書は「歴史政治学」の「歴史篇」とされるが、続刊予定だった「理論篇」、「人物篇」は未だ姿を現していない。⁴⁷

篠原一は成蹊大学文学部に移ると、社会史研究に関心を移していった。それは社会史が「一般の庶民の価値観」や「民衆文化」を扱っているからというもので、彼の市民運動への政治的興味と軌を一にしていた。⁴⁸従って篠原はニューレフトとしての「イギリス社会史派」には共感するものの、彼らが提起した紋切型比較政治への警告を理解したとは言い難い。成蹊大学退職（一九九四年）後の篠原は、「市民の政治学」に執念を燃やし、政治史研究からは離れて現在に到っている。

ちなみに篠原一の岡門下の後輩には、坂本義和（国際政治学）、三谷太一郎（日本政治外交史）と並んで横山信が

いた。篠原と同年代の横山はヨーロッパ外交史の助手となり、同助教授、教授へと昇進した。デルカッセ外交を扱った助手論文は、近代国際政治史を常にドイツ側から見た神川彦松に対するアンティテーゼであった。⁴⁹ 次いで横山は、戦間期フランス外交と東欧の反独「小協商」を論じている。⁵⁰ けれども横山は教授昇任後に早世してしまい、ヨーロッパ外交史講義は江口朴郎の愛弟子である齊藤孝が、高橋進の登壇まで非常勤で担当することになった。

注

- (1) 南原繁／蠟山政道／矢部貞治『小野塚喜平次——人と業績』(岩波書店、昭和三八年)、三、二九一—三〇、三二二、五五一—五九、三〇六—三〇七頁。
- (2) 『小野塚喜平次』、四二—頁。
- (3) 小野塚喜平次「現代獨逸ノ軍國主義トライチケの學說」、『國家學會雜誌』第二九卷第一号(大正四年)、三三一—五二、同第二号(大正四年)、一五七—二〇八頁。
- (4) 『小野塚喜平次』、二九四、三二一、四二二—四二〇頁。齊藤眞／本間長世／岩永健吉郎／本橋正／五十嵐武士／加藤幹雄編『アメリカ精神を求めて——高木八尺の生涯』(東京大学出版会、昭和六〇年)、八七頁。
- (5) 吉野作造「滯徳日記」、『新人』第二二卷第三号(明治四四年)、二八〇頁。
- (6) 吉野作造「滯徳日記」、『新人』第二二卷第四号(明治四四年)、三八八—三八九頁。
- (7) 『吉野作造選集5』(岩波書店、平成七年)、二四七頁。吉野作造「獨逸の國民性」、『新女界』六卷二二号、五七—六四頁。
- (8) 『吉野作造選集5』(岩波書店、平成七年)、一二七—一三九、二六三—二六四頁など。
- (9) 『吉野作造講義録』、『國家學會雜誌』第二二卷第九・一〇号(平成二〇年)、九〇—一〇八頁、第二二卷第三・四号(平成二二年)、一九二—二二八頁。
- (10) 横田地弘「岡義武教授点描」、『岡義武著作集』付録(岩波書店、平成五年)、五二頁。
- (11) 岡義武「環境に關聯して觀たる十九世紀末獨逸の民主主義運動」、『國家學會雜誌』第四二卷第三号(昭和二年)、四七九—五四一頁。

- (12) 岡義武「紹介…ウェルトハイマア「英國労働黨の相貌」、『國家學會雜誌』第四六卷第二号(昭和七年)、三〇〇—三〇六頁。なお岡はこれ以前に、イギリス自由党没落史の書評も書いており(「ファイフ「英國自由黨史」、『國家學會雜誌』第四三卷第一号(昭和四年)、一七八—一七九二頁)、イギリス左派への一貫した興味が看取できる。
- (13) 岡義武「獨立労働黨の成立と其の歴史の意義」、『國家學會雜誌』第四七卷第二号(昭和八年)、三一七—三四三頁、同五号(同年)、六九二—七二六頁、同六号(同年)、八五七—八六九頁。
- (14) 「岡義武——人と学問——丸山真男氏に聞く」、『岡義武著作集』付録、六一—三頁。
- (15) 『アメリカ精神を求めて——高木八尺の生涯』、七七—七八頁。
- (16) 岡義武『岡義武著作集第六卷——国民的独立と国家理性』(岩波書店、平成五年)。
- (17) 『岡義武ロンドン日記』(岩波書店、平成九年)、三一七—三一八頁。
- (18) 岡義武「國際政治概観」、『國家學會雜誌』第五六卷第一号(昭和一七年)、一一—三九頁。
- (19) 『岡義武ロンドン日記』、二九六—二九七頁。
- (20) 矢部貞治『新秩序の研究』(弘文堂書房、昭和二〇年)。
- (21) オットー・ケルロイター(矢部貞治/田川博三訳)『ナチス・ドイツ憲法論』(岩波書店、昭和三四年)。
- (22) 南原繁『國家と宗教——ヨーロッパ精神史の研究』(岩波書店、昭和一七年)。
- (23) 丸山眞男「南原先生を師として」、『國家學會雜誌』第八八卷第七・八号(昭和一七年)、四〇八—四〇九頁。
- (24) 神川彦松「外交史学から國際政治史学へ——國際政治学と國際政治史学の開拓・樹立について」、同『神川彦松全集』第八卷(勸草書房、昭和四五年)、八一—一六頁。
- (25) 『小野塚喜平次』、写真(七二、七三頁の間)。
- (26) 神川彦松「ビスマルク保障政策史論に就て——國際政治史論の本質及方法への一考察」、同編『立教授還暦祝賀外交史論文集』(有斐閣、昭和九年)、三〇九—四一四頁。
- (27) 神川彦松『世界大戰原因論』(岩波書店、昭和一五年)。
- (28) 「國際法學會再出發——共榮圈理論の樹立へ」、『東京朝日新聞』昭和一六年二月一日(朝刊)、二頁。「揺がぬ團結性——波瀾」の度に一路強化」、『東京朝日新聞』昭和二六年二月一日(朝刊)、二頁。「神川帝大教授宅で壮漢亂暴を働く——執

- 筆の論文に難癖、「東京朝日新聞」昭和九年一月二十四日（夕刊）、二頁。
- (29) 「土屋、神川両教授不適格」、「朝日新聞」昭和二年九月六日（朝刊）、二頁。
- (30) 『岡義武ロンドン日記』、三一五―三一六頁。齊藤孝編『思索する歴史家・江口朴郎』（青木書店、平成三年）、四四九頁。江口の講義案を基にした著作に『帝国主義の時代』（岩波書店、昭和四四年）があるが、これは「外交史」講義とも符合するのではと推測される。
- (31) 岡義武『獨逸デモクラシーの悲劇』（弘文堂、昭和二四年）。
- (32) 篠原一「私の生き方」、篠原一著作目録（平成九年）、一二、一六一―一七頁。クレイン・プリントン（岡義武／篠原一訳）『革命の解剖』（岩波書店、昭和二七年）。
- (33) 篠原一『ドイツ革命史序説——革命におけるエリートと大衆』（岩波書店、昭和三二年）。
- (34) 篠原一「解説」、『岡義武著作集』第八卷（岩波書店、平成五年）、三二―一頁。
- (35) 篠原一「私の生き方」、一八頁。
- (36) 『篠原一著作目録』、二七頁。篠原一「国内政治家としてのシュトレゼマン——適応と不適応の間」、篠原一／横山信編『近代国家の政治指導——政治家研究Ⅰ』（東京大学出版会、昭和三九年）、一五七―二二七頁。
- (37) 篠原一「ドイツ通信（その3）」、『新政経』一六三号（昭和三九年）、三一頁など。
- (38) 篠原一「西ドイツ政治学とその周辺」、「思想』五〇六号（昭和四一年）、一一―一頁。
- (39) Hajime Shinohara, *Sresemann als Innenpolitiker. Zwischen Anpassung und Nichtanpassung*, Bonn 1965. 本文七十九頁、文末註二十一頁のこの論文は、現地ドイツの製本業者により橙色の表紙を付けて製本されたものである。
- (40) 『東京大学法学部研究・教育年報4』（一九七五／一九七六年）、一八―八頁。
- (41) 篠原一「ヨーロッパの左翼運動（1）」——ドイツから帰って、『月刊労働運動』66／2月号（昭和四二年）、九七―一〇五頁。
- (42) 篠原一「ドイツ通信（その1）」、『新政経』一六一号（昭和三九年）、四三―頁など。
- (43) 篠原一「ヨーロッパの左翼運動（2）」——ドイツから帰って、『月刊労働運動』66／3月号（昭和四二年）、五二―五九頁。
- (44) イマヌエル・ガイス「第一次世界大戦におけるドイツの戦争目的——「フィッシャー論争」と西ドイツの歴史学界」、『思

- 想』第五〇三号（昭和四一年六月）、六六五―六六六頁（篠原一の序文）。
- (45) 『東京大学法学部研究・教育年報1』（一九六九／一九七〇年）、九五頁。
- (46) 『東京大学法学部研究・教育年報4』（一九七五／一九七六年）、一八八頁。
- (47) 篠原一『ヨーロッパの政治「歴史政治学試論」』（東京大学出版会、昭和六一年）。
- (48) 篠原一「私の生き方」、二二―二二頁。
- (49) 横山信『近代フランス外交史序説』（東京大学出版会、昭和三八年）。
- (50) 横山信「第一次世界大戦後におけるフランスの東ヨーロッパ政策」、『國家學會雜誌』第八〇卷第一・二号（昭和四一年）、一―二二頁、同第三・四号（同年）、一八八―二二六頁。